
花井春樹の日常

弾正忠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花井春樹の日常

【Nコード】

N8424L

【作者名】

弾正忠

【あらすじ】

ある日の花井春樹の日常の一コマ。

（前書き）

はじめまして。「弾正忠」と申します。

もはや時代遅れもはなはだしいですがスクールランブルSSです。以前連載小説にするつもりで書いたのですが第1話のみ完成したところで何だか熱が冷めてしまいました放置されていたんですが、このサイトの存在を知りまあ世に出すだけ出してみても、と思いました。

内容は花井くんハーレム（？）ものになる予定でしたWW

「花井せーくんばい、こんにちはっ！」

ある日の昼休み。

廊下で不意に声をかけられた花井は振り返るが、目の前でこちらに笑顔を向ける女生徒を見てやや怪訝そうに眉を顰めた。

「ん？君は……………」

「もうっ、覚えてないんですか？」

ちよつと怒ったような表情になる女生徒。

見知らぬ相手からの言葉に、花井はややうろたえる。

「す、すまないが…………覚えていない。というより会った記憶がないのだが」

「はあ……………まあ、仕方ないか。実際にこうやってお話するのは初めてですし」

「む……………」

落胆したような女生徒の様子に、花井は慌てたように目の前の女生徒の印象を頼りに必死に記憶を探る。

やや金色がかったショートカットの髪。猫の様に大きな瞳が活発に動く。

美少女、と称してよい顔立ちである。

これほど印象的な相手ならば、何らかの形で記憶に残っていてもいいはずなのだが……

「仕方ないですね……………じゃ、ヒント1」

そんな花井の様子を面白そうに見ていた女生徒であったが、不意に
そう言って指を一本立てる。

「て・ん・も・ん・ぶ」

「天文部？………ああ」

その言葉に花井の脳裏に一つの像が結ばれる。

一度、偶然天文部の教室に入ってしまったことがあり、そこにいた
結城つむぎの隣にいた二人の女生徒のうち一人が彼女であった。

「あの時………結城君と一緒にいたな、確か」

「思い出して下さいました？」

「あの時は失礼した。自分の名前を呼ばれた気がしたとはいえ、い
きなりノックもせずドアを開けるなど」

「あはは、いいですよ。おかげで先輩にお目にかかれたんですか
ら」

律儀にも後輩に向かって頭を下げる花井に美樹は軽く笑って手を振
る。

「ええっと………」

「稲葉美樹。1年D組です」

「1年D組というと………八雲君の」

「はい」

花井の表情が微妙に緩む。

「それで稲葉……君、僕に何の用かね？」

「えっと、花井先輩とお知り合いになりたくて」
「へ？」

この瞬間の先輩の表情、面白かったよー、とは後に美樹がクラスメイトに語って聞かせた話である。

「それはどういふ……」

「ですから、花井先輩とお知り合いになりたかったんです」

一瞬の自失より立ち直った花井の問いに、美樹は再び同じ言葉を返す。

その彼女の顔に浮かぶのは、小悪魔的な微笑。

やや不気味な予感を感じつつも、花井は彼女の次の言葉を待った。

「あのですね、私、花井先輩って基本スペック高いと思うんですよ。武道の達人だし、成績も学年1位だし。

何か引っ張っていつてくれそうな感じだし、クラスの子達は暑苦しくて嫌、なんていってますけど……

そんなところも含めて先輩をよく知るためにお話してみたいなーっと思ったりして」

一気にまくし立てられやや鼻白んだ風の花井の態度に、美樹はおかしそうに笑う。

「ま、そんなわけでこの不肖稲葉美樹、先輩のお友達リストに加えていただきたく参上した訳ですよ」

「ちょ……………」

「あ、もちろん『恋人候補』リストでも私はぜんぜんかまいませんからねっ！」

「ま……」

「っていうか私はその方が嬉しいかもです」

「何を……」

「そういうことで、先輩これから仲良くしてくださいねーっ！」

「あ、おいっ！稲葉くん……」

花井に反論の隙すら与えず、機関銃のように言いたいことだけを言い残すと、

美樹は風のように身を翻しそのまま彼の視界から消えていった。

（あれは………花井君と……稲葉？）

それは全くの偶然であった。

二人の様子を見かけた結城つむぎは、思わず彼らから隠れるように柱の影に入る。

ここからでは何を話しているのかは分からないが、稲葉の嬉しそうな表情とから察するに、どうやら彼女の方が積極的にコミュニケーションをとりにいったようだ。

天文部部室での彼女の言葉を思い出す。

「どうやらあの言葉、ただのミーハー根性によるものでもなかったのだろうか。」

「……これ以上競争相手は増えないで欲しいんだけどなあ」

そう呟くと、つむぎは彼らから視線を外して歩き出す。

彼が一途に思い続けている塚本八雲。

友達以上恋人未満な幼馴染、周防美琴。

どちらも人の目を引き付けるに足る美少女であり、何の特徴もない自分との差を常々思い知らされているというのに。

稲葉も稲葉で魅力的な少女である。

彼女のような娘に全開で好意を向けられて心の動かない男はいないであろう。

そんな風にしばし物思いに耽りつつ歩いていた彼女が、自分に近づく一人の男子生徒の姿に

気付かなかったのはある意味仕方の無いことかもしれない。

「結城君」

「うひゃっ！」

不意に名前を呼ばれ、つむぎは思わず数センチほど飛び上がる。

しかもその声の主は、今の今まで彼女の心を不法占拠していた相手であった。

「もしかして驚かせてしまったか？……………それはすまなかった」

「あ、いや、別に、その、ちょ、ちょっと考え事してた私も悪いんだし、その」

「そうか。ならいいのだが……………結城君？」

花井が心配そうに顔を覗き込んでくる。

顔が赤みを帯びてくるのを自覚し、つむぎは思わず顔をそらした。

「結城君……………なにやらぼうっとしていたようだが……………心配事でもあるのかね？」

「い、いやっ、そんなことは……………」

完全に裏返った声で答えるつむぎ。

そんなつむぎの態度を誤解したのか、花井はさらに突っ込んで聞い

てくる。

「心配事ならこの僕に話してくれたまえ。この花井春樹、全身全霊を傾けて解決にあたらせてもらおう！」

（だから………あんたが原因なんだってば。もう少しデリカシーとか遠慮ってものはないわけ？）

花井の必要以上に気負った声に、つむぎは内心でため息をつく。そうしているうちにやや落ち着きを取り戻してきたつむぎは、花井に笑顔を向けると言った。

「あ、いや、うん。だいじょうぶだから。花井君が心配することじゃないよ」

「そうか………？遠慮することはないぞ結城君！」

「ありがとね。心配してくれて」

「何、当然の事だ。じゃあ、何かあったなら遠慮なく僕を頼ってくれたまえ」

そんな花井の言葉を背に受けて、結城つむぎは再び歩き出した。

———まったく………あの朴念仁は。

そう心の中で呟き、つむぎは小さくため息をつく。

そう。あの朴念仁だ。

思い込んだら一直線で、周りに迷惑かけまくりで。人の気持ちなんて全然考えてなくて。

おせっかい焼きでデリカシーがなくて。

………だけど、すごく優しい。

そんな彼のいいところを知る少数の人間に自分が入っていること。
そのことは彼女にとって嬉しい事であった。
だがその認識もいつ「少数派」でなくなるか分からない。

「……負けないから」

知らず知らずのうちに、つむぎはそう呟いていた。

「花井君、ちょっといい？」

「な、なんだ高野君………」

教室に帰った花井は、不意に高野に呼び止められた。やや腰が引けたような対応になってしまう。

何も後ろめたいことはないはずなのだが、どうも高野に対しては苦手意識が抜けない。

そんな花井の態度に気づいてかそうでないのか、高野は後ろ手に隠していた四角い物体を花井の目の前に突きつけて見せた。

「これは……デジカメか？」

画面を覗き込んだ花井の表情が引き攣るのに数秒の時間を要した。
そこには、花井に嬉しそうに話し掛ける女生徒の姿と、戸惑ったような花井の姿がしっかりと収められている。

「こ、これは………」

「廊下を歩いてたら偶然見つけたのよ。花井君が1年生の女の子に告白されてる場面」

「こ……告白などではなーいっ!」

「あら、そう?」

その獣のような叫びにも、表情の一片すら動かすことなく晶は答える。

「でも、この顔。どう見ても恋する女の子の顔よ」

「あのな……恋も何も稲葉君とまともに話したのはあの時が初めてなのだぞ」

「そ……………」

高野はそこで言葉を切り、意味ありげな瞳でじっと花井の顔を覗き込む。

身長差があるため下から見上げるようなその視線に、花井はなぜか怯みを覚えた。

すべてを見通すかのような高野のこの瞳が、花井は苦手だった。

「ふん……まあいいけど」

「あ、おい高野君……………」

そう応えようと、もう興味はないとばかりに背を向け高野は自分の机へと歩き出した。

鞆より自分のノートPCを取り出し、デジカメを接続する。

数十秒の後、画面に先ほどの花井の画像が映し出された。

晶は頬杖をつくとき、しばし画像の中の彼の表情を眺める。

その顔に浮かぶのはいつもと同じ無表情であったが、よく見れば唇の端が僅かに笑みを象っていたのが見えただろう。

しばらくそうしていた晶だがやがて写真を一つのフォルダに収めると、PCより目を上げ、

先ほどからこちらを窺っている花井へと目を向ける。

高野と視線があうと、花井はあわてて目をそらした。

「全く……相変らず馬鹿」

そう、誰にともなく呟くと晶はPCを閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8424/>

花井春樹の日常

2010年11月30日10時48分発行